

コミュニケーションに困難を持つ子どもに対する母親の認知と働きかけの関連性

金城, 志麻
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/873>

出版情報 : 九州大学心理学研究. 3, pp.121-127, 2002-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン :
権利関係 :

コミュニケーションに困難を持つ子どもに対する 母親の認知と働きかけの関連性

金城 志麻 九州大学大学院人間環境学府

The relation between mother's cognition and response to children with communication problem.

Shima Kinjyo (Graduate school of Human-Environment Studies, Kyushu University)

The purpose of this study was to examine the factor of making emotional relationship between the mothers and their children with communication problem. The subjects were 35 mothers whose children with autism had cure at the institution. The types of disorders were almost autism. The questionnaire consisted of three aspects ; 1) the understanding of disorder to their children, 2) the reaction of the mothers to their children, 3) mothers' cognition to the concerns from their children. As a result, mothers recognized that children showed much behavior to them as they consider it mild. They, who recognized as their child's behaviors occurring much high, responded to them with more sympathy.

From these results, it was considered that mother's cognition to children's behavior related to their understanding to the disorder and sympathetic response to them.

Keywords: mother's cognition, children with communication problem, sympathetic response

1 問題と目的

我々が社会的生活を行う上でコミュニケーションは欠かせないものである。母親は子どもがまだ喜怒哀楽も曖昧で明確な意志を持たない段階から、子どもの微笑みや泣く等の原初的な情緒から、何らかのメッセージをうけとり、様々な働きかけを行う。

この点についてMeins (1997) は、母親が子どもの発達の早期段階から、明確な心を持った存在と見なし、心的な観点から子どもの行動を解釈し、また心的状態に関する言葉を発話の中に多く織り交ぜる傾向を持つとし、それを「mind-mindness」とした。その傾向を持つことによって、発達の早期の段階に養育者との間に安定した愛着関係を持ち得る。また子どもの様々なシグナルに対し敏感に応じ、子どもの「発達の最近接領域」に働きかけることにつながると述べた。また遠藤 (1998) は、生理的現象といわれるような生後まもない子どもが示す睡眠中の微笑を、母親は喜びという情緒の反映と見なすように、母親側にある種の「錯覚」が誘発され、子どもの情緒に関連した意味を絡ませて、様々な働きかけを行うと述べている。また、こうした「錯覚」は親の養育に対する動機付けを高め、子どもとの愛着関係を築く上で不可欠であるが、子どもが障害を持つ場合は、母親からの働きかけを誘発しにくく母子間の相互作用の質が低下する可能性が否めないとも述べている。

一方で、コミュニケーションに障害を持つ子ども、特に自閉症児は、情緒的な交流に障害があり他者と関わる

事を目的とした行動が少ないと言われている (小林, 1999)。また、自閉症児からの要求行動に対する他者の反応は、必ずしも適切に対応されているとは限らない (藤本, 1998) と示されている。このように、彼らの行動は意味づけがしにくく、母親は子どもに働きかけた際の子どもの反応の乏しさという要因だけでなく、子どもの行動に対して、子どもの意図や情緒を推測する事が難しくなり、さらに働きかけを行うことが難しくなると考えられる。そのため、コミュニケーションに障害を持つ子どもと母親の相互交渉を支える上で、母親が子どもの行動をどのように捉えるかという、子どもについての母親の認知は重要と考えられる。

ところで、障害児を持つ母親についての研究は数多くなされており、それらを大別すると3つに分けられる。一つは母親が持つ現実のストレスについての研究である。二つ目は障害児を持つ母親の障害受容に関する研究であり、三つ目に障害児に対して母親が持つ価値観の葛藤に関する研究である。一つ目の障害児の母親の心的ストレスという観点から、稲浪ら (1980) は自閉症児、精神発達遅滞児、肢体不自由児、盲児の母親について調査を行い、自閉症児の母親が最も心的ストレスが高いと示している。また二つ目の母親の受容過程に関して、田中 (1990) はダウン症児に対する母親の受容過程には5段階あり、その段階に応じた援助内容を検討していく重要性を示唆した。三つ目に関して今川・古川・伊藤・南 (1993) は、障害児を持つ母親の態度要因に焦点を当て母親が社会に対する期待で消極的、中間的、前向きとい

う3つの態度に分かれたことを示した。

このように本邦における、障害児を持つ母親についての研究は、様々な視点から広領域にわたって研究がなされてきた。しかし、これまでの研究は母親の心的状態や母親を取り囲む環境に焦点を当てた研究がほとんどである。さらに自閉性障害児等コミュニケーションに困難性を持つ子どものコミュニケーションを考える際、他者の関わり的重要性が示唆されるが、母親の子どもの捉え方や働きかけを検討した実証的研究は少ない。

自閉症児の養育者の認知に関する研究としてKasari and Sigman (1997) があげられる。Kasari and Sigman (1997) は、自閉症児の親における子どもの気質に対する知覚とストレス感情が、実際の相互交渉にどう影響を及ぼしているのかということについて、自閉症児、ダウン症児、精神遅滞児、障害を持たない子どもの親との比較を通して検討した。その結果、子どもの気質をより難しいと知覚した自閉症児の親はストレス感情を持ちやすく、また相互交渉場面において子どもとの関わりがより少ないという関連性を示した。その結果から、今後の自閉症の親子に対する介入において、相互交渉的行動に対する養育者の認知の役割を検討する必要性を提唱した。

以上のことから、確かに子どもが障害を持つ場合、特に自閉症等、コミュニケーションに困難性を示す場合は、母子間の相互交渉を阻害する要因が多い可能性が考えられる。しかしながら、母親の子どもの行動に対する認知は可塑性があり、また自閉症児の母親も子どもの些細な反応や行動に意味づけし、その意味づけに応じた働きかけをする母親の存在も示唆されている。

そこで本研究では、コミュニケーションに障害を持つ子どもの行動に対する母親の認知と、働きかけとの関連性について検討を行うため、以下の3点を目的とする。

- ①母親の障害の捉え方と、子ども行動に対する母親の認知との関連性について
- ②子どもの行動に対する母親の認知と、母親の共感的働きかけとの関連性について
- ③子どもの行動に対する母親の認知と、子どもの反応を引き出す母親の働きかけとの関連性について

II 予備調査

1. 目的

子どもの行動に対する母親の認知に関する質問紙を作成する。

2. 方法

【対象者】

幼稚園児（年少児；男児22名 女児19名 平均CA=3.3、年中児；男児11名、女児10名 平均CA=5.0）の母親63名である。

【手続き】

幼稚園の担当保育士を通じて質問紙を配布した。総配布数は100、回収数は62（回収率62%）であった。

【質問項目の構成】

母親が子どもから向けられた行動をどの程度認知しているのかを測定することを目的に作成された。すなわちこの質問項目により、子どもの行動に対する母親の認知が測定されるものとする。質問項目は、エインズワース（1982）が述べた特定の相手に向けられる行動や、遠城寺式やKIDS等の発達検査の対人関係の項目を参考にして、以下の側面から構成された28項目である。

(1) 愛着行動

① 定位行動 (orientational behaviour)

愛着行動を母親の方へ向けるような効果を持つ行動（例 母親の行動を目で追う）。

② 信号行動 (signalling behaviour)

母親を子どもの方へ引きよせる効果を持つ行動（例 泣く）。

③ 接近行動 (approach behaviour)

子どもが母親の方へ近づいていく行動（例 母親の後を追う）。

(2) 母親の感情理解

母親の意図や感情の理解を示す行動。

(3) 母親への働きかけ

母親に自分の意図や気持ちを示す行動。

以上の側面から構成された項目が、自分の子どもにどの程度当てはまるかについて4件法で回答を求めた。

3. 結果

子どもの行動に対する母親の認知を測定する質問項目への回答に、因子分析を行った結果、3因子を抽出した（Table 1）。第1因子は18「お母さんを見て子どもが微笑む」、26「子どもがお母さんの嬉しい、楽しい気持ちに反応する」等、子どもが母親へ情緒的な関わりを向けるような行動と関連する項目に高い負荷量が見られた。従って「情緒的交流行動」因子と命名した。第2因子は、20「子どもが不安なときお母さんにしがみつくと」、7「お母さんが子どもから離れるとき子どもが後を追いかけてくる」等、子どもが母親を安全基地の対象とした行動と関連する項目に高い負荷量が見られた。従って「安全基地的行動」因子と命名した。第3因子は9「子どもがお母さんに対して言葉あるいは身振りで愛情を示す」、21「子どもがお母さんに言葉あるいは動作で要求を伝える」等、子どもから母親への意思伝達行動と関連する項目に高い負荷量が見られた。従って「意思伝達的行動」因子と命名した。

尺度構成に当たっては、因子負荷が.40以上で、負荷の

Table 1 子どもの行動についての母親の認知に関する因子分析結果

項 目	情緒的交流行動	安全基地的行動	意思伝達行動
お母さんを見て子どもが微笑む	0.66	0.26	0.34
子どもがお母さんの言葉かけをなんとなく気にする	0.61	0.19	0.29
子どもがお母さんのうれしい、楽しい気持ちに反応する	0.61	0.03	0.32
子どもが行動するとき（した後）お母さんの表情を気にする	0.60	0.32	0.22
子どもがお母さんの行動を目で追う	0.57	0.08	0.19
子どもがお母さんの気持ちに気づいている	0.54	0.14	0.11
子どもがお母さんとの遊び（歌遊び、手遊び）に関心を持つ	0.52	0.20	0.07
子どもがお母さんの声を聞き分けている	0.46	0.08	0.06
子どもがお母さんの反応を伺いながらいたずらをする	0.45	0.20	0.11
子どもが何かをするときお母さんに許可を求める	0.43	0.23	0.09
子どもが泣いているときお母さんが働きかけると泣き止む	0.42	0.16	0.15
子どもが不安なときお母さんにしがみつく	0.15	0.79	0.02
お母さんが子どもから離れるとき子どもが後を追いかけてくる	0.17	0.70	0.05
お母さんがいなくなると子どもが泣き出す	0.17	0.66	0.08
子どもが遊んでいるとき時々お母さんのところへ戻ってくる	0.24	0.54	0.14
子どもが不安なときお母さんがいることでその不安が安らぐ	0.08	0.51	0.38
子どもがお母さんに甘えてくる	0.23	0.47	0.33
子どもが見知らぬ人といるときお母さんの方へ近づく	0.26	0.46	0.21
子どもが言葉あるいは声でお母さんに何かを伝えてくる	0.12	0.08	0.65
子どもがお母さんに対して言葉あるいは身振りで愛情を示す	0.33	0.34	0.60
子どもがお母さんに対して言葉や身振りで要求を伝える	0.13	0.05	0.55

絶対値の差が.50以上の項目を選んだ。

III 本調査の方法

1. 対象者

療育機関に通う子ども（平均CA=8.0, range2:9-13:0）の母親35名である。子どもの障害の内訳は自閉性障害12名、自閉傾向8名、知的障害5名、ウエスト症候群2名、ダウン症候群2名、注意欠陥多動障害1名、学習障害1名、その他3名である。

2. 手続き

コミュニケーションに障害を持つ子どもの母親60名に、各療育機関の責任者を通じて調査用紙を配布した。総配布数は60、回収率は35（回収率58.3%）であった。

3. 調査内容

調査内容は以下の3項目から構成された、質問紙調査である。

(1) 子どもの行動に対する母親の認知

予備調査で作成された、子どもの行動についての母親の認知を測定する21項目（Table 1）を用いて、これらの項目が自分の子どもにどの程度当てはまるかについて4件法で回答を求めた。

(2) 子どもの障害に対する母親の捉え方

専門機関による診断ではなく、子どもの障害に対する

母親の捉え方について、重度、中度、軽度の中から選択を求めた。

(3) 子どもの行動に対する母親の働きかけ

子どものパニック行動、こだわり行動、多動行動について、その行動が起きた状況、行動を起こした理由、その行動に対する母親の働きかけについて自由記述により回答を求めた。

(4) 母親からの積極的な働きかけ

日頃、母親から子どもに積極的に働きかける状況、その理由、具体的な働きかけについて、自由記述による回答を求めた。

4. 結果の処理

(1) 子どもの行動に対する母親の認知

子どもの行動に対する母親の認知についての回答（4件法）が得点化（以下、認知得点と示す）され、その得点に基づき、子どもの行動を多く認知する母親群（以下、認知得点高群と示す）と、子どもの行動が少ないと認知する母親群（以下、認知得点低群）に分類された。

(2) 子どもの障害に対する母親の捉え方

子どもの障害に対する母親の捉え方を独立変数、認知得点を従属変数にした一要因の分散分析を行う。

(3) 子どもの行動に対する母親の働きかけ

子どもの行動に対する母親の働きかけに関する自由記述は、共感的働きかけの程度により得点化された。得点

Table 2 評定基準

3点	積極的働きかけ	子どもがその行動をとった理由を理解し、あるいは理解しようとして子どもとの共有体験を持つような関わり 例 一緒に遊ぶ、なぐさめる等
2点	消極的働きかけ	子どもがその行動をとった理由を理解し、あるいは理解しようとする関わりだが、子どもとの共有体験には至らない 例 声かけ、他のモノに注意を向けさせる
1点	共感性に乏しい働きかけ	子どもがその行動をとった理由や気持ちを理解しようとしなない関わりであり、その関わりは子どもとの共有体験には至らない 例 ほっとく、叱る等

化は、積極的な共感的働きかけと判断される内容には3点、消極的な共感的働きかけと判断される内容には2点、共感性が乏しい働きかけには1点が与えられた (Table 2)。回答された自由記述に対して、3名の評定者が独立に評定を行った。なお評定の不一致の部分に関しては評定者の協議によって決められ、一致率は83%であった。

その結果から、子どもの行動により共感的な働きかけを行う母親群と、共感性に乏しい働きかけが多い母親群に分類した。

(4) 母親からの積極的な働きかけ

それぞれの母親が働きかけた数をカウントし、その平均数を算出した。

IV 結 果

1. 母親の障害の捉え方と、子どもの行動に対する母親の認知との関連性に関する分析

子どもの障害に対する母親の捉え方 (重度・中度・軽度) と子どもの行動を捉える母親の認知に関連があるかを検討するため、子どもの障害に対する母親の捉え方を独立変数、得点化された子どもの行動に対する母親の認知を従属変数にした一要因の分散分析を行った。その結果、主効果に有意な差が認められた ($F(2, 31) = 6.40$, $p < .05$)。さらにTukey法による下位検定を行ったところ、重度と軽度、中度と軽度での認知得点に有意な差が見られた (Figure 1)。このことから母親は我が子の障害を重度であると捉えるほど、子どもの行動が自分に向いていないと認知し、逆に障害を軽度と捉えることで、子どもから自分に向けられた行動が多いと認知することが示された。

2. 子どもから自分に向けられた行動が多いと認知する母親の共感的働きかけに関する分析

子どもの行動について、母親の認知の程度と共感的働きかけとの関連性を検討するため、認知得点高群と、認知得点低群の母親における子どもの行動全体を通じた働

きかけについてt検定を行った。さらにパニック行動、こだわり行動、多動行動に対する働きかけについて、それぞれ検定を行った。認知得点高群・低群における母親の働きかけの平均得点をTable 3に示す。その結果、認知得点高群と認知得点低群の母親間では、子どもの行動全体を通じた働きかけの総得点に有意な差が見られ ($t(33) = 1.89$, $p < .05$)、またパニック行動において有意な差が見られた ($t(27) = 2.40$, $p < .05$)。つまり子どもから自分に向けられた行動が多いと認知する母親ほど、子どもの行動に対してより共感的な働きかけを行っておりそれはパニック行動において顕著であった。このことから子どもの行動に対する母親の認知と働きかけには関連があると示された。

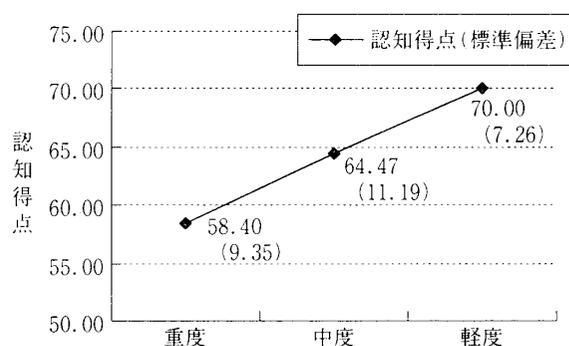


Figure 1 母親の障害の捉え方と子どもの行動に対する母親の認知得点

3. 共感的働きかけを行う母親の認知の側面に関する分析

子どもの行動に対する共感的な働きかけが、子どもの行動に対する母親の認知のどのような側面に関連があるのかどうかを検討するため、共感的働きかけを行う母親群と、共感性に乏しい働きかけを多くする母親群の認知得点の平均値、および因子ごとの平均値についてt検定を行った (Table 4)。その結果、共感的働きかけを行う母親群と、共感性に乏しい働きかけを多くする母親群では総

Table 3 子どもの行動についての母親の認知得点高群・低群における子どもへの働きかけ得点

	全体	パニック行動	こだわり行動	多動行動
高群	2.19(0.44) *	2.39(0.44) *	1.90(0.37)	2.16(0.63)
低群	1.89(0.37)	1.98(0.44)	1.70(0.45)	1.92(0.43)

* = $p < .05$ () の中は標準偏差**Table 4** 母親の共感的働きかけ高群・低群における子どもの行動についての認知得点

	全 体	情緒的交流 行動	安全基地的 行動	意思伝達 行動
高群	68.10(8.70) *	36.71(5.91) +	20.90(4.81) +	10.48(1.62)
低群	61.58(11.30)	33.36(6.64)	18.71(3.82)	9.50(1.99)

* = $p < .05$ + = $p < .10$ () の中は標準偏差

認知得点に有意な差が見られ ($t(33)=1.87, p<.05$), また「情緒的交流行動」因子得点, および「安全基地的行動」因子得点には有意傾向が示された ($t(33)=1.58, p<.10$; $t(33)=1.39, p<.10$). つまり, より共感的な働きかけを行う母親ほど, 子どもから自分に向けられた行動が多いと認知し, それは「情緒的交流行動」および「安全基地的行動」の側面について多く認知する傾向にあった。このことから, 子どもの行動に対してより共感的に働きかける母親は, 子どもの行動の中でも「情緒的交流行動」や「安全基地的行動」といった愛着を成立させるような側面を多く認知する傾向が示された。

4. 子どもの行動に対する母親の認知と, 子どもの反応を引き出す母親の働きかけに関する分析

子どもの行動について, 母親の認知の程度と子どもの反応を引き出す働きかけとの関連性について検討するため, 認知得点高群と認知得点低群の母親が働きかけた平均数についてt検定を行った (Table 5)。その結果, 有意な差は見られなかった。このことから, 子どもの行動に対する母親の認知の程度と働きかけの量的側面とは関連がないことが示された。

Table 5 母親の認知得点高群・低群における子どもへの働きかけ数

	働きかけ数
高群	1.43(0.84)
低群	1.60(0.71)

() の中は標準偏差

V 考 察

1. 子どもの行動に対する母親の認知を高める要因

子どもの行動に対する母親の認知の程度について, 母親の障害の捉え方という側面から検討した結果, 母親が子どもの障害を軽いと捉えるほど, 子どもから向けられた行動が多いと認知していることが示された。この結果から, 子どもがその障害故に何を表しているのか推測しにくい行動を示していたとしても, 母親が子どもの障害を軽いと捉えることで, その行動に何らかの意味づけを行い, 子どもの行動をキャッチしている可能性が推察される。逆に言えば, 母親が障害を重いと捉えてしまうことで, 子どもとのコミュニケーションに限界を感じてしまい, 子どもの行動を意味づけしキャッチする事が困難になると考えられる。しかしながら, 今回の研究においては, 実際に子どもが呈する障害の程度と母親の障害の捉え方を比較検討していない。そのため, 実際の障害の程度が重く, 母親への働きかけが弱い, あるいは行動が表している意味を推測しにくい行動が多いため, 母親は子どもの行動に対する認知が低くなった可能性も否定できない。田中 (1999) は, 障害とは体や精神の構造や機能に異常がある状態すべてをいうのではなく, 障害の程度や現れ方も, 関わり手側の関わり方や社会的環境によって変化すると示唆している。本研究で対象となった母親の中には, 子どもの療育担当者によると, コミュニケーションの程度は良好だと報告をうけたにも関わらず, 子どもの障害を重度だと捉えている方や, また逆に, 他者とコミュニケーションを取ることが難しいと報告を受けた子どもの障害を軽度と捉えている母親が存在した。このことから, 実際に子どもが呈している障害という要因以外に, 母親が子どもの障害をどう捉えるかによって, 子どもの行動に意味づけしキャッチする認知の側面に違いが生じる可能性も考えられるであろう。今後, 実際に子どもが呈するコミュニケーションの状態

と、母親が捉える障害とのズレについて検討を行う必要があると考えられる。

2. 子どもの行動に対する母親の認知と働きかけの関連性

子どもの行動に対する母親の認知と働きかけの関連について検討を行った結果、子どもから母親に対して向けられた行動を多く認知する母親は、子どもから向けられた行動が少ないと認知する母親よりも、より共感的な働きかけを行うと示された。また、それは特に子どものパニック行動に対して多く見られた。パニック行動は、こだわり行動や多動行動と比較して自傷や他傷といった行動を伴うことが多く、母親が対応に迫られる可能性も考えられる。しかし、子どもから母親に向けられた行動が多いと認知する母親は、子どもが何を表しているのか推測しにくい行動に対しても何らかの意味づけを行っているため、特にパニック行動のような推測しにくい行動に対して、より共感的な働きかけを行う可能性も示唆できるであろう。

そこで子どもの行動に対する共感的な働きかけが、子どもの行動に対する母親の認知のどのような側面に関連があるのかどうかを検討した。その結果、より共感的な働きかけを行う母親ほど、子どもの行動の「情緒的交流行動」および「安全基地的行動」に側面について多く認知する傾向にあった。Meins (1997) が子どもを心を持った存在と見なし、心的な観点から子どもの行動を解釈することを「心を気遣う傾向」と呼んだ。本研究の子どもの行動を多く認知する母親も、Meins (1997) が述べた「心を気遣う傾向」を持つことで、様々な子どもの行動を「情緒的交流行動」および「安全基地的行動」といった母親との愛着を成立させるような側面として捉えたと推測される。そうすることで、子どもの行動の意図が推測しやすくなり、パニック行動のように解釈しにくい行動に対しても、より共感的な働きかけを行うのだと考えられる。

3. 子どもの反応を引き出す母親の働きかけ

子どもの行動に対する母親の認知と働きかけの量的側面について検討を行った結果、関連がないことが示された。このことから、子どもから母親に対して向けられた行動を多く認知する母親と、子どもから向けられた行動が少ないと認知する母親において、普段の生活場面で子どもに働きかける量には違いが見られないことが示された。しかし、今回は母親から子どもの反応を引き出すような働きかけの質的側面までは検討していない。母親に対して向けられた行動を多く認知する母親は、子どもから向けられた行動が少ないと認知する母親よりも、より共感的な働きかけを行うと示されたように、子どもの行動に対する母親の認知の違いで、母親が子どもの反応を

引き出す働きかけの質的側面にも違いが見られる可能性が推察できる。また本研究で用いた方法は、質問紙により自由記述で回答を求めるものであった。そのため、母親の子どもへの働きかけを多角的に検討することができなかった。また働きかけをいくつ記述しているかで働きかけの量をカウントしたため、回答する母親の態度の違いによって回答数が左右された可能性が考えられる。そのため、今後、実際の母親と子どもの相互交渉場面を検討する等、さらに多面的に子どもの行動に対する母親の認知と働きかけを検討する必要がある。

VI 総合考察と今後の課題

本研究の結果から、主に以下の3点が明らかになった。

- ①母親が子どもの障害を軽いと捉えるほど、子どもから向けられた行動が多いと認知する。
- ②子どもから母親に対して向けられた行動が多いと認知する母親は、子どもから向けられた行動が少ないと認知する母親よりも、より共感的な働きかけを行う。
- ③より共感的な働きかけを行う母親ほど、子どもの行動の「情緒的交流行動」および「安全基地的行動」に側面について認知する傾向にあった。

これらの結果から、子どもの行動に対する母親の認知は、子どもの障害の捉え方や、また子どもへの共感的働きかけと関連すると推察できる。針塚 (1993) は、「単に情報の伝達や一方の要求に他方が応じるだけの関わり合いではなく、相手への強い関心とともに安心感や喜怒哀楽などの感情を共有する関わり合いを“情緒的コミュニケーション”と呼び、そのような情緒的共有化の体験過程を通して、子どもは親や他者の情緒的な状態に関心を向け始める」と述べている。また「自閉症児の情緒的表出の障害は、全面的な表出の障害ではなく、相互に関係し合っている二人の関係性のあり方の反映であり、また“情緒的コミュニケーション”の発達は、一方が強い思い入れの関心を持って、懸命に関わることから始まる」とも述べている。本研究の母親も針塚 (1993) の述べた「思い入れ的関心」をもつことで、子どもの実際に呈する障害の程度にとらわれず、子どもの行動に「情緒的交流行動」や「安全基地的行動」といった関係を構築するような側面に意味づけし、それが、共感的な働きかけにつながったと考えられる。また、このような母親の働きかけが、他者との情緒的なコミュニケーションに困難性をもつ子どもと次第に情緒的なコミュニケーションが成立してくる可能性が考えられるだろう。しかし今回の研究では、母親側の要因に視点をあて、子どもの行動に対する認知や働きかけについて検討を行ったため、子どもの発達の变化との関連はできなかった。そのため今後、母親の子どもを捉える認知についてさらに多角的に検討

していくと共に、それに伴う子ども側の内的要因（実際に呈する障害の状態等）や発達的变化までも含めた検討をしていく必要がある。そのような検討を通して、コミュニケーションに困難性をもつ子どもだけに焦点を絞った療育だけでなく、その母親も視野に入れた療育援助が提唱できるであろう。

付 記

本論文を作成するにあたり、ご指導していただきました針塚進先生に深く感謝いたします。

また調査に快くご協力いただきました、お母様方に心よりお礼申し上げます。

文 献

- Bowlby, J 1976 黒田実郎・大場葵・岡田洋子・黒田聖一（訳）母子関係の理論 I 愛着行動 岩崎学術出版
- Elizabeth, Meins 1997 *Security of Attachment and the Social Development of Cognition Psychology Division, Staffordshire University, UK*
- 遠藤俊彦 1998 乳幼児の情緒の表出と理解 教育と医学, 23-30
- 藤本光孝 1998 障害部門「障害児・者に関する研究の動向：精神遅滞、自閉性障害児・者を対象とした実践的研究」 教育心理学年報, 37, 121-128
- 針塚 進 1993 情緒的コミュニケーションの発達 教育と医学, 33-39
- 針塚 進 1998 自閉症児の情緒的関わりの特性 教育と医学, 31-37
- 稲浪正充・西 信高・小椋たみ子 1980 障害児の母親の心的態度について 特殊教育学研究, 18(3), 33-41
- 今川民雄・古川宇一・伊藤則博・南美智子 1993 障害児を持つ母親の評価と期待の構造 特殊教育学研究, 31(1), 1-10
- Kassari & Sigman 1997 Linking Perceptions to Interaction in Young children with Autism *Journal of Autism and Development disorder*, 27, 1
- 小林隆児 1999 関係障害から見た自閉症理解と治療 発達, 第78巻, 第20号, ミネルヴァ書房, 22-35
- 田中千穂子・丹波淑子 1990 ダウン症児に対する母親の受容過程 心理学研究, 第7巻, 第3号, 68-79
- 田中真理 1997 「関係性」からとらえた障害児・者研究の動向 教育心理学年報, 第38集, 130-141.